

ヨーロッパの気象台を巡って (承前)

佐 貫 亦 男

6. フランスの気象台

フランスの気象台 (Meteorologie Nationale, 1, Quai Branly, Paris 7) は公共事業及び民間航空省に属し、エッフェル塔の見えるセヌ河畔にある。出入のめんどろさはイタリーの気象台のようなことはないが、玄関のドアが横のボタンを押して入る仕掛けになっているのでまごつき、先に入った女事務員に教えてもらってようやく入門できた。

台長 Viaut, 研究部長 Perlat といったところが応待して、早速ゾンデの贈呈、日本の現状説明、フランス測器の質問などを例によって始めた。ところがヴィオー台長の英語はまずいもので(よくこれで国際会議が務まるものだと思うくらい)、もっぱらベルラ氏が答えてくれた。もっともベルラ氏とてもけつしてうまくはない。気象用レーダーは3 cm のものが2台、無人測候所はアフリカとかマダガスカル島にいくつかあるそうで、欧州では人間がいるのでいらぬという。

両氏ともフランス人の常としてなかなか皮肉で、こちらが測測施設の話をする、雲はだめじゃないかといったふうに茶々を入れるのであった。

これが利いたわけではないが、煙草の高価さ(スイスの倍はする)、ホテルの汚なさ(別に安ホテルではない、他が満員なので止むを得ず一般旅館に泊った)、パリ人のなげやりの気持に恐れをなし、もう昔のパリのおもかげはうすらいでいる感じであった。フランスを去るとき、私のノートにはParis, jamais plus! (パリには二度と来ないぞ)と書いてある。

パリの気象台を訪れた6月9日の午後は、和達台長渡歐の用件で、U.G.G.I. (30, Avenue Rapp, Paris 7) に行った。ところがこの番地の建物では秘店 Laclavère 氏の名をいうまで絶対にわからなかった。第一玄関にU.G.G.I. など表札に掲げてないのである。門番が不在だからなおいけなかったが、同じアパートの住人も知らない。それに各住居の戸口には名札が出ていないから、一軒ごとにベルを鳴してはフランス語で聞くよりしかたがない。私が再びパリを呪いたくなるとき、ようやく最上階のドアから顔を出した令嬢がラクヴェール氏の住居である旨を告げた。

もうフランス語を使う意欲も低下しているときのな

で、令嬢が英語ができると聞いてほっとした。ラクヴェール氏は出張中、今晚帰る由で、用件を話して私の宿に電話してもらうことにして戻った夜、電話がかかって用は済んだ。

翌6月10日気象台で待合せ、トラップ観測所の長 Bruyère 氏の迎への自動車に乗ってトラップに見学に行った。

ブリュイエール氏は何しろシトロエンの古車ですからと弁解していたが、パリからの自動車道路では軽く100 km/h のスピードを出す。ところがこれを軽く抜いて行くルノーがある。ブリュイエール氏は、あいつ少々危いぞなどといいながら運転して行くのであった。彼はフランス語しかできないというので、フランス語で話したが、この日は調子がよくて何とか意志が通じ、後で観測所へ行ったときも、所員とはフランス語だけの会話であったが、かなり色々なことがしゃべれた。もっとも自分のわかる範囲の見学だから、そのためもある。こんなことはめったにない。

観測所で出て来たのは、Strutz (地上測器) と Morin (高層測器) の両人が主で、各種の地上高層測器と検定及び、驚いたことにガラス温度計まで作っているところまで見せてもらった。風の隔測などは大いに感服した。温、湿、圧も同様の試作がある。寒地用ダインスもあれば、500ワットの風車(ロボット用)もあるという具合で、フランスの測器を相当見直す必要に迫られた。

レーダーは3 cm のもの、ゾンデの波長は28及び400 M.C. である。検定設備も案外整っている。

フランス人気質として、客をそっこのけにして愉快にしゃべっているので、聞くとも魚釣りの話らしい。Qui est le grand pecheur? (誰が一番釣師だい) と聞くと、ストリッツがおれだよといって魚の大きさを手で示して見せる。帰りぎわにゾンデを貰った。

帰りの自動車の中で、ブリュイエール氏はしんみりと、1人子を死なせてしまったが、おれももう51才だから子供はできないだろうという。気象台まで送ってもらって別れた。宿までは地下鉄で帰った。

7. 英国の気象台

6月12日ロンドンキングスウエーの空軍省内の気象局を訪問した。ここは嚴重だぞという崑山気象研究所長の

御注意があったので、旅券は大事に抱えて行ったが、入口を間違えて大分先の門へ戻される一幕があった以外は、無事に気象局の親切な秘書 Miss Bell の室に通された。

台長 Sutton 博士は不在で、次長 Darwood (綴りが違うかも知れぬ、実は必ず署名をもらうことにしていたのだが、次に述べるような不愉快なことがあったので忘れた) に会い、ゾンデの寄贈の申出でをしたとたんに、英国のゾンデが遙かによいと思うといわれ、すっかり話の腰を折られてしまった。

大体英国は私には始めてであったが、英国人の親切さ、例えば地下鉄で行先掲示板などを読んでいると、通りすがりの人が必ず May I help you! と聞いてくれるので、大いに好感を持った次第であった。この次長は例外の方らしい。

もう余り日本の現状など話す元気は消滅したが、それでも今後の見学や、レーダーの質問をした。レーダーのことは Jones という若い専門家を呼び、5 cm 波長のことを質したが、すこぶる消極的で、さあ別にその必要はありますまいとの返事であった。

その後英国の見学などの用があって、再び気象局を訪れたのは6月21日になった。またベル嬢を訪ねて行くと隣の室の Mr. Bell の室に入ってしまう、後であれはあなたの夫君ですかと聞いたら、とんでもない、全然関係はありませんと弁解していた。それは別として、英国人の親切というものは、けっしてわざとらしくなく、心から出たもののように感じられ、実に気持のよいものであった。それはこちらの心の動きを細かく見ていて、暖かい思いやりを与えてくれることから生ずるものであった。この特質はドイツ人にもイタリヤ人にも無い。例えば英国人ほど、相手の意見に同意する国民はない。そして自分の意見もそれとなしに同意させるのである。

この日はうまくアレインジしてあんな見え、私が同意すると、なちまちマラード会社の技師 Mr. Harris が自動車を持って現れ、クロリーの観測所 (Meteorological office, Pease Pottage, Crawley, Sussex) に連れて行ってくれた。

英国の田舎は美しいと聞いていたが、正にその通り、よい時代を経て来た広さと深さが滲み出ているのであった。オークの林と古い城など、中学生のころ習った英国の風景が目の前に展開されて行く。

クロリーは今軽工業都市を建設中とかで、住宅工事の最盛中であつた。観測所はバラック建て、レーダーゾンデ観測室は改造中であつた。

主任の J. Jay 氏がちょっと会って話をしただけで、レーダーゾンデの調整で忙しく、もっぱらマラード会社のハリス氏が案内説明してくれた。自分のところの機械を収めた場所だから勝手は知っている。

15時の放球も見せてくれた。英国のレーウィンゾンデ観測所は8箇所、毎日レーウィン4回、ゾンデ2回という話は後でできた。ここで試験中のマラードレーダーゾンデはまだルーチンに取り入れられたわけではない。忙しい中でも5時近くなると御茶を入れてくれるのは英国らしい。

結論として結構な機械だが、値段が張るというような感想を述べて辞した。ハリスはサービスのつもりで、帰りに Dorking 近くの North Hillなどを廻ってくれ、英国南部の Downs、いわゆる sleepy hills を見せた。ロンドンなどに住むのに愚の骨頂といった具合に美しい住宅が存在する。その上 Surrey, Weybridge を通り、テムズ河に沿って Windsor の城まで連れて行ってくれた。

翌6月22日はベル嬢の取りはからいで、ロンドン St. Pancras 駅から Bedford 行の汽車に乗りイーストヒルのレーダーステーションを見に行った。これはロンドンの北東 50 km ばかりのところ、1時間ほど後 Luton 駅に着いた。所長 Harper 氏が迎えに来てくれる手筈になっていたが、改札口には誰もいない。駅員に聞くともう一つ出口があるというので、そちらに行ってみたら果して汽車がついてしばらくになるのに根気よくハーパー氏が待っていた。もの静かな人で早速自分の古い自動車 (1935 年型のヴォックスホール) に乗せてレーダーステーション (East Hill, Dunstable near Luton, Bedfordshire) に連れて行った。

観測所は僅か4人の所員で、3 cm, 10 cm のもの各2台あり、ダンスタブルの予報センターからの要求に従って観測をする。10 cm の大型は旧式の軍用で P.P.I. と R.H.I. が別になったものである。瞬間出力は 500 kw といいた。このほかにパイボール用測風レーダーが1台あつた。これも古い軍用で自動車に積んだものである。

敷地は広いが人員の少いには驚いた。ブラウン管の映像も見せてくれたが、現れるのは飛行機ばかりであつた。猫が一疋牛乳をねだってハーパーさんについて歩いた。

8. ドイツの気象台

6月29日自動車旅行の途中フランクフルトの街に入ってドイツ中央気象台 (Deutscher Wetterdienst, Frankfurt/M., Bockenheimer Landstrasse 42) を訪問した。大きい建物であるが気象台だけではないらしい。台長 Dr. R. Benkendorff は出張中とのことで、次長 W. Gassert 氏に面会し、ゾンデを寄贈し、ドイツのゾンデはミュンヘンで貰う約束をした。時間が無かったので簡単に挨拶し、測器関係の Dr. M. Uinzpeter に会っただけで引上げた。

ミュンヘンの測器部 (München, Lazarettstrasse

11a)を訪れたのは7月2日で、建物は住宅街の中にあつてまごついた。遊んでいる子供たちに聞いてももちろんわからず、働いている労働者が教えてくれた。入口の柵には看板が出ているけれども、これから行く人も困るのであろう。アパートメントの2階の一劃で、ミュンヘンの住宅難を示すものである。

出て来たのは Dipl. Ing. F. Woelfle で、部長である。眼鏡をかけた面白い男で、その日は退庁間ぎわだったから、日本の測器について話をし、ドイツの事情を聞いただけにした。ドイツのレーダーはまだ先のことで、とても金がかかるからやりきれないといっていた。

どこの气象台も、つましやかな役所という感じがしたのであるが、特にこの部長さんは煙草を手巻きで作っては喫っていた。次の日行ったときは普通の巻煙草をふかしていたので、本日は煙草を製造しないのかと聞いたら、昨晚誰とかから貰ったんだという話であった。上利式温度計を持っていったが、スーツケースの中で端子のところからガラスの折れたのを、断った上で差上げておいたら、翌日自分で修理したと見せてくれた。

次の日部内の設備を見せてくれたが、各国のゾンデや各種試作現用測器をガラス箱に陳列してあるところにドイツ人らしいきちょうめんさが現れている。

農業気象用の熱線風速計、ゾンデに使っているプレスした毛髪などは注目すべきであった。プレスの操作はロールの間を通して、断面側長比を 1:10 ぐらいにすればよいのだから、日本でも試みなさいといつて、1944 年 E. Frankenberfer が出した文献をくれた。

私の著書も日本語なのに欲しがるといふのだから、献辞を書いて進呈して来た。ドイツのゾンデは後から宿に届けてくれた。

9. ゼンティスの山岳観測所

スイスの山岳観測所ゼンティス(海拔 2,500 m)は、降水量の観測や防水風速計を見学するため、ぜひ訪問したいと思っていたが、ようやく7月23日に行くことができた。

交通のきわめて不便なところで、チューリヒからは St. Gallen まで行き、乗換えて Herisau までローカル線、それから郵便バス(Postauto)で Schwägalp、それからケーブルカー乗ると教えてもらって行った。実はサンガレンの手前の駅 Gossau で乗換えるのが順路だが、車掌に聞いたときはもうそこを発車した後で、サンガレンに着いて乗換えようとしたら、ちょうど汽車が発車してしまつた。これで行かぬと最終の郵便バスを逃すので、駅長にタキシードを世話してもらって Urnäsch まで追いかけることになった。40分近く走って郵便バスには間に合ったが、タキシード代 33 スイスフラン(約 3,000 円)を取られることになってひどく予算に響いた。汽車で行けば回遊切符でたつたフランのところであ

る。つまらぬ見得をすてて、怪しい場合は車掌に聞くべきである。

交通不便なだけ、この辺は人の混まない美しいところである。ゼンティスのケーブルカーは物凄く傾斜で、スイス人すらも恐ろしいといつたくらい、上は霧の中にかくれて見えない。

山頂の駅に着いて、霧の中を手すりにつかまって観測所まで行った。簡単な手すり、岩を踏み外したら下に暗く見える氷河まで何にも止めるものはない。

観測所下の官舎(観測所へは内部から階段で登れる)のドアをノックすると、観測員 Ernsu Hostettler 氏の奥さんが出て来て、同氏は 18 時の観測が始るので今早い夕飯を食べているという。

ホステットラー氏は飯の途中で出て来て、いつ来るかと前から待っていた、これから観測で忙しいから 8 時ごろ来てくれという。帰りがけに観測所を見て行くと、防水風向風速計のついた小さい小屋と、降水量計やキャンベルの日照計のならば金網柵を張りめぐらした露場(官舎の屋根になっている)だけの設備で、用水を取るから鳥に餌をやるとき汚さないで欲しいとか、然断侵入者は処罰されるという掲示が出ていた。

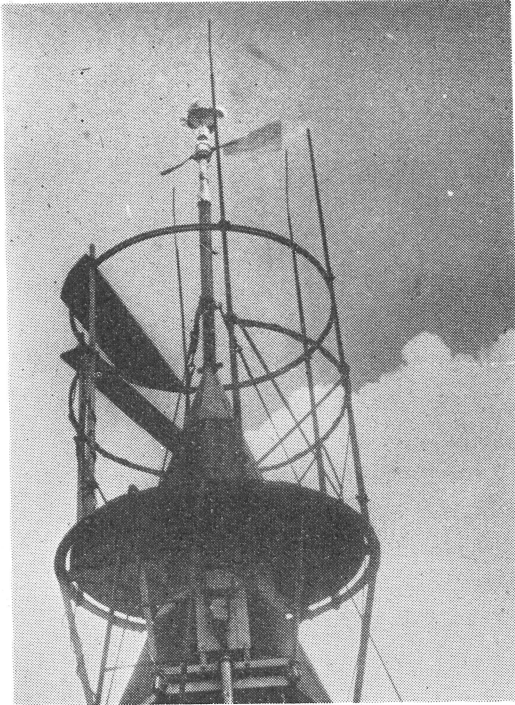
登山者も日帰りが多いが、駅の上の宿屋に室を申込みと、それでもほとんど満員であった。ケーブルカーで上って来るときから立ちこめていた霧はますます濃くなり、時々霧が切れると美しい青空がのぞく。

こちらも夕食をすませて 7 時半ごろ押しかけると、仕事が終わった後で、ゆっくり雑談することができた。

この観測所に勤めたのは 1931 年のことで、今年でもう 23 年勤続という。観測時刻は 6, 7, 10, 13, 16, 18, 2130 の 7 回で、観測項目は国際方式である。通信は波長 1.8m, 2w の短波送受機を持ち、5km 離れた受信所で電話に中継するので、スイス国内ならばどこでも呼出せるという。

防水風速計は 4 杯で、電熱式、但し入力手動で操作し 200~1,400w ぐらい、風杯は秋にアルミニウム製のものを銅製に交換して着氷に備える由。始動風速はアルミニウム製で 0.5 m/s。銅製で 1.5~2 m/s 程度である。風向計は普通の矢羽根だが回転軸だけを電熱し、150w という。気温の平均最低は約 -25°C。低極は -30~-32°C、平均風速は 33~36 m/s が普通で、時に 39~40 m/s に達し、最高記録は 50 m/s という。もちろん霧氷は頻繁で、従って防水式になってから、どれだけ助かったかわからぬといっていた。これはルージュン台長も自慢していたが、1,200w を入れると、相当な厚さの霧氷も 4 分ぐらいで飛ぶそうである。

降水量計の設置場所も議論したが、この山の頂上は、東に急で西に緩い傾斜を持つ稜状だから、風向によって捕そく率は異なるけれども、互いに平均するように、現在



第1図 ゼンティス山岳観測所測風塔と
防水風向風速計

の位置、つまり楔の頂点に置いたのだそうである。

電力供給のあったのは1939年、ケーブルカーの設置は1941年のことで、それまでは夏の間に9箇月分の食料、燃料、器械を人力で荷上げたという。今でも20 m/s以上の風が吹く日はケーブルカーが運転中止になるらしい。一体冬の間に病気にでもなったらどうなるんでしようかと聞くと、Man darf nicht erkranken (病気してはならぬのだ) といひ切るのであった。

私は思わずホステットラー氏の顔を見つめた。病気をしてはならぬ、しかしもし重い病気に襲われたとしたら、当時の冬籠りの時は死を意味したであろう。私は感銘して彼の顔に深く刻まれた半生の苦闘のしわを眺めるばかりであった。

もちろん健康のほかには慎重な生活を送ることが必須で、ホステットラー氏も、少し古いだけでまだ食えると思われる雑詰などいくつ棄てたかわからぬといった。

このような生活が23年、一人息子も麓の小学校へ行くようになると下宿させて、親もとへ帰るのは夏休みだけ、外には吹雪の狂う山の観測所で、ささやかな飾りつけを迎える夫婦きりのクリスマス、その写真は特に私の心を動かしたものである、こういう観測員の存在は私にとって大きい発見であった。

その息子も今は結婚してチューリヒに住み、自分で作って与えた鉱石受信機で遊ぶ小さい孫の写真を私に示すのであった。若いころはスイス山岳会の Rettungs-

kolonie (救難班) を担当し、いくたびか遭難者を、岩と氷を越えてかつぎ上げたという。もう今年62才、ただ一つの楽しみはあと3年すれば65才の停年となって恩給がつくから、山を下って静養することである。頑丈な身体も長い間の山岳生活のため、もう心臓が衰えている。それは当然であろう、先ほど私は観測所まで、小さい12キロばかりのスーツケースを持ち上げるだけで何度か休まなければならなかった。



第2図 ゼンティ山岳観測所主任ホステット
ラー夫妻測風塔の下にて

彼には忠実な細君が唯一の協力者であって、交替はない。1年に1度4週間の休暇が取り、そのときはチューリヒ工科大学の学生がアルバイトで観測する。今年も物理の学生2人が4日ばかり後に来るそうで、私に早く来いといったのはそのためであった。

小柄な細君は話の最中にも、キャンベル日照計の記録を整理記録していて、点が1箇あると5分と計算し、慣れたものなので、奥さんももちろん官吏でしょうねと聞くと、私はただ Zusatz (附属物) に過ぎませんと笑うのであった。

山岳観測をやる前の職業を質問すると、ホステットラー氏はかつてはウィンタートウアの著名な機械工場ズルツァーで、ジーゼル関係の Techniker (技手) ということ、気象はその後勉強したそうである。

私は日本の富士山測候所の例を引き、日本ならば当然表彰されるどころですよといったら、スイスでは Selbstverständlich (当りまえ) のことで何にも表彰などありませんと答えた。

話はつきないが、また2130の観測時刻が迫って来たので辞した。外の霧は強い山の雨と変わり、懐中電燈を借りて濡れた岩を傳って宿に帰る途中、暗の中に駅の灯が赤く映えて何ともいえない妖気のこもった夜道であった。(中央気象台)